【第 18 回大会報告記　芥川龍之介と上海 ― 中国旅行から 102 年 ―】

1 日目午前 【開会行事】【記念講演】

報告　宮﨑尚子

上海大会の一日目午前に、開会行事として譚晶華先生（中国外国文学学会日本文学研究会元会長・上海外国語大学元副学長）による記念講演（「新時代における中国の日本文学研究について 」）が行われた。

記念講演は、中国における日本文学の研究のこれまでの歴史について、興味深い解説が中心だった。改革開放に始まり、プロレタリア文学から新時代へ至るまでの状況について詳しい解説があった。「一、翻訳から始まる」では、「1，清代」として梁啓超（日本に亡命）が翻訳した東海散士の『佳人の奇遇』、『経国美談』のことが紹介された。「2，五、四運動」では 1919 年に発生した五四愛国運動について、魯迅、郭沫若、周作人等が日本の文学紹介に貢献したことを示された。当時の中国は日本の文学を通して、日本の事情や世界の潮流を知るという側面があったことが分かった。新思潮、白樺、耽美派については『中国が翻訳した日本文学目録』（161 冊）を紹介された。「3，新中国成立からの 30 年間」では、①古典、②近代作家、③木下順二等の受容があったことが説明され、秀逸なプロレタリア文学として宮本百合子や壷井栄の名が挙がった。「4，中国日本文学研究会」においては、『川端康成十巻集』（河北教育出版社）、『川端康成小説集』『川端康成散文集』（人民文学出版社）の紹介があった。譚晶華先生によると、高慧勤氏が、翻訳する者には以下の責務があると主張されていたということだった。一つは「翻訳は形から離れたとき本意を得る。」で、もう一つは「本質に踏み込んで学ぶと同時に、本質を越えた高みに立って学ぶことも大切である」という考え方である。その後、「二、中国における日本文学研究の発展」として、「1，中国の日本文学研究会」という中国一級学術団体について、「2，中国の日本文学研究の発展」として、「①3つの十年（開拓の段階、蓄積と昇華の段階、20 世紀末～今に至るまでの段階）」の説明があった。「②研究の分野」としては、作家・作品研究、文学史研究、様式研究、比較文学があるということだった。この他、王暁平氏の「近代日中文化交流史稿」等の業績も紹介された。以上のように、中国における日本文学の研究の動向が丁寧に一つ一つ紐解かれた。これまでの中国の先人達の緻密な研究の積み重ねが、今の高度で充実した中国における日本文学研究に繋がっているのだということがよく分かり、深い感銘を受けた。

翌日、中国における日本文学研究の実態について更に知りたいと思い、上海外国語大学構内の書店で日本文学に関する書棚から、『日本近代文学名作鑑賞』という一冊の本を買い求めた。同行していた日本の研究者達と、これは圧巻だとしきりに感心し合った。朝の限られた時間だったこともあり、手にした時は簡体字だったので気が付かなかったが、実は譚晶華先生の編まれたご本だった（中国語の表記は谭晶华）。まさに、日本文学研究の第一人者であるということを重ねて理解した。

1 日目午後【研究発表】

第Ⅰ部・第 1 会場

報告　足立直子

第Ⅰ部はいよいよ研究発表の始まりである。2 つの会場に分かれての実施となった。今野哲氏の司会のもと、3 名の方がご発表された。

まず、最初は潘貴民氏による「伝統と現代：芥川龍之介の宗教文学創作」という題目でのご発表である。芥川の文学営為を、宗教との関わりにおいて問い直した試みで、特に、仏教とキリスト教に関わる諸作品を未発表のものを含めて、初期から晩年に至るまで丹念に整理をされた内容であった。東洋の伝統的な仏教文化と西洋のキリスト教文化とに引き裂かれた道程という文脈を提示された上で、最終的に芥川の死を宗教的葛藤の中に位置づけられた。今回は神道についての言及はなかったものの、日本の精神風土に宿るアニミズム的世界観と合わせて、理知的作家芥川が、宗教的なものと如何に対峙しながら創作活動を行っていったかという問いかけは、芥川研究の重要テーマの一つであることを改めて意識化させてくれるご発表であった。

次は、張東悦氏による「芥川龍之介「湖南の扇」論―「僕」の長沙体験の生成をめぐって―」という題目でのご発表である。長沙には実際、芥川も訪れているが、作中の「僕」とは滞在日程が異なることや、交通手段も、汽車から「沅江丸」という船に改変されていることなど、「僕」という設定が意識的に再構築されたものであることを、一連の長沙における排日運動を視野に入れながら明らかにされた。また、章瑋氏による「手帳六」の翻刻についても丹念に目を通し、ここにある芥川の長沙体験のメモと作品を比較することで、そこからも芥川の取捨選択が窺えることを指摘された。玉蘭が人血ビスケットを食べることへの周囲の多義的な眼差しの交錯や、回想という形式の中で、動乱期における中国社会の中での人々のもがきや苦しみを改めて見つめ直そうとする志向が指摘できることなど、今後の「湖南の扇」研究の進展に大いに寄与するご発表であった。

そして、最後は任常毅氏による「一つの世相　二つの情懐」という題目でのご発表である。任氏は、芥川龍之介と魯迅を、同時代に生きた人物として比較し、その人生の結末においては、大きな相違があることを指摘しつつも、作風や小説技法においては、国境を越えて時に交響し合うその様相を抽出した。魯迅が芥川の「鼻」と「羅生門」を翻訳し、また、芥川がその翻訳について「中々正確に訳してある」と評したことは有名であるが、車夫、カラス、娼婦などの細部での描写の比較は大変興味深いものであった。同時代、即ち「一つの世相」から、芥川と魯迅のそれぞれの「情懐」を捉えていく試みは、まさに本学会の国際学会としての意義を再確認することにも通じるものであると感じた。以後、今回の大会の研究発表では、魯迅についての言及が度々登場し、フィールドワークにおいても、魯迅ゆかりの地を実際に探訪するなど、上海大会ならではのさまざまな体験ができ大変有意義であったことを付け加えておく。

第Ⅰ部・第 2 会場

報告　藤原まみ

第 18回国際芥川龍之介学会 1 日目は、10月28日(土)に上海外国語大学虹口キャンパス、お

よび、オンラインのハイブリッド形式で行われた。会場の参加者には予稿集が配布された。

午後の第Ⅰ部の第2会場は 13 時 30 分から 14 時 5 分まで、高麗霞氏(上海外国語大学)の司会で、三名の個人発表が行われた。林悦氏(フェリス女学院大学大学院)の「芥川龍之介『奇怪な再会』論―山東女性・孟惠蓮に内在する「古典」―」、邵若晨氏(南開大学外国語学院)の「中国愛好者芥川の皮肉表象の再検討―「蛮市」天津を手がかりに―」、曲莉氏(北京外国語大学)「芥川龍之介『上海游記』の外と内―上海のメディア空間と案内人のネットワークなど周辺資料からのアプローチ」である。

林悦氏は、『奇怪な再会』の主人公孟惠蓮に内在する「古典」を、山東の歴史文化との関連性から論証した。

邵若晨氏は、天津という軸から、芥川龍之介の中国体験と表象におけるずれについて検証した。

曲莉氏は、上海の村田孜郎と島津四十起関連の資料を紹介・検証し、芥川の滞在した上海におけるメディアと案内人のネットワークから、『上海游記』を読み解いていった。大変多くの資料について紹介・検証がなされたが、時間の関係で割愛せねばならない部分があったことは残念であった。

会場には多くの聴衆が集まり、各氏の発表後には大変活発な質疑応答や発表者への助言等が交わされた。

報告者は今回初めて、中国の大学を会場校とする大会に参加した。大会の学術的熱気の高さ、来場者への気配りの高さに驚いた。なかでも、先生方によるものはもちろんのこと、大学院の学生さんたちの発表も同様に、様々な資料の収集とそれに対する読解・検証・分析をふまえたものであったこと、さらに、質疑応答においては、発表内容に対する洞察のみならず、研究者倫理に関することについても、躊躇なく、はっきりと指摘しうる、健全な学問的空間であったことに深く感動した。このような場に参加できた幸運に感謝する。

第Ⅱ部

報告　劉 佳

大会一日目午後は現場とオンラインで研究発表が行われた。

第 II 部はパネル発表「芥川龍之介と上海の文化的トポスーヒトと知のネットワーク」と題し、何荷(四川外国語大学/中国)、鄒波(復旦大学/中国)、秦剛(北京外国語大学/中国)による研究発表及び討議が行われた。

以下、報告者による研究発表についての印象を記す。

何荷氏の「上海游記」における料理屋「小有天」の表と裏は、「上海游記」の十五南国の美人(上)に書かれた料理屋「小有天」という飲食店の歴史的変遷、文化的影響力、そして現代日本の商品やアート分野での役割について深く掘り下げて議論した。過去と現在の店舗の写真を比較することで、「小有天」が伝統を保ちながら現代の顧客を引き付ける方法を見て取ることができた。研究では、「小有天」が表面の栄光と背後にある現実の対比の象徴になり得るという見解も提出された。上海の「小有天」は、有名なレストラン以上のものであり、20 世紀の社交と文化交流の重要な場として著

名人や政治家を引き付け、来客に強烈な印象を残した。その物語と背景は、飲食業が文化と歴史の媒体として持つ独特な力を示している。この歴史的な文脈での飲食店は、食べ物自体の芸術を反映しているだけでなく、その時代の社会関係や文化的傾向の鏡でもある。食べ物と飲食店は、人々、概念、歴史をつなぐ絆になり得る。

鄒波氏は「メデイア関係者と観光者のまなざし―芥川龍之介「上海遊記」を中心に―」というテーマで深い議論を行った。芥川の視点を通して、近代中国の姿とその地域及び日本のメディアとの相互作用を垣間見ることができた。案内者余洵、李人傑（李漢俊）などの紹介により、教育背景やメディアの発展など、中国と日本の交流の多次元的な側面を知ることができた。印象深いものは、芥川龍之介のような歴史的人物が中国で経験したユニークな体験を明らかにするだけでなく、メディアと文化の間の複雑な相互作用を映し出している。特に興味深かったのは、芥川の『上海遊記』が文学作品であると同時に、初期の中日関係や文化交流を研究するための重要な歴史的資料であることである。このような研究を通じて、異なる文化的背景を持つ人々がどのようにお互いを観察し解釈するか、そしてその理解がどのように私たちの過去と現在の認識を形作るかをより深く理解することができる。この異文化間視点の研究は、今日のグローバル化された世界において依然として重要な意味を持っている。

最後、秦剛氏「上海の芥川龍之介と李漢俊、魯迅とのかかわり―翻訳と出版が結んだ知のネットワーク」というテーマに沿って、李漢俊の多言語能力、東京大学での学び、そして芥川龍之介、魯迅とのつながりが深掘りされた。明らかにされた見どころは、李漢俊が東京大学に在籍していた時期が芥川と重なる可能性が高いという点、また、李漢俊が 1921 年に訪れた際の記録や、芥川龍之介の俳句、そして魯迅の『新青年』への翻訳など、彼らの交流や文化的交渉が具体的な証拠を通じて示された。特に興味深いのは、芥川と魯迅がどのようにして相互の作品に影響を与えあったのかという点である。魯迅が芥川龍之介の全集を購入したことは、彼が芥川の作品を重んじ、影響を受けている可能性があることを示している。彼らの作品や通信は、日中の文化交流において重要な役割を果たした。また、李漢俊が中国共産党の関係者として活動していた証拠も新たに明らかになり、この時代の政治的・文化的背景がより鮮明になった。秦剛氏の発表を通じて、歴史上の人物間のつながりがいかに繊細であるかも認識した。それらは直接的な対話や協力ではなく、共通の知人、似たような経験、相互の作品への賞賛を通じて静かに形成されているかもしれない。

コメンテーターとしての市川裕見子氏は、自分が再度上海游記を読み直し、それを踏まえて芥川龍之介が上海で経験したことの重要性について考えたことを述べている。彼女は、芥川が接した上海の洋人や文化人が、彼の作品に大きな影響を与えたことを感じ取り、同時にそのような濃密な体験が可能になった人的ネットワークの厚みに気づいたと指摘した。また、発表者たちの研究が芥川の上海体験をより具体的に映像的に浮かび上がらせる助けになったこと、そして芥川の表現技術についても深い考察があったことを述べている。さらに、彼女は芥川の師匠であり先輩である人物たちの影響や、当時の日本のエリートとしての立場と南満州旅行についての芥川の描写への考察に注目した。その上で、当時の日本の社会状況やマスコミの立場との関係を指摘し、現在の立場から過去を共感しつつ理解を深めていく必要があるとして、参加者の感想を聞きたいと述べた。

質問・コメント・感想：

三人の研究発表に関する質疑応答を始め、参加者に質問を求めた。

まず、高橋龍夫氏は、芥川龍之介が新聞記者として上海に滞在していた時の経験について話し、特に新聞者身分に関する対策や情報についての研究を詳しく説明した。また、利用者数の増加やメディア間の追加に関する影響を指摘した。秦剛氏は、中国を旅行した体験から見た具体的な問題点について提起し、北京と他の都市の違いや上海の西洋化された部分に対する印象について述べた。また、社会における不満や社会誘致が如何に感じられるか、今から 100 年後の視点についても考察した。何荷氏は秦剛氏の答えの上で、発言した。最後に鄒波氏は、読者の意識と作品に対する理解、そして時代と共に変化する読者の概念について述べ、未来の読者意識についての予測を話した。これらの議論は文学作品、特に芥川龍之介の作品を現代の文脈や将来的な解釈で考える上での洞察を提供するものとなっている。

次、宮坂氏と秦剛氏は、上海の新聞やハガキ、魯迅の関連性について議論し、特に新聞記事の読み込みと、ヨーロッパとアジア、特に中国の社会的な状況と新聞記者としての反応の欠如について、中国における新聞記者としての体験や社会的状況についての見解を述べた。また、文化的事情や当時の新聞に関する話題についても言及したが、いくつかの情報は現在得られない状況であることが語られた。

最後、五島慶一氏は政治と文体との関連性について、発表者に質問を投げかけた。近代文学と中国の政治に対する抵抗について尋ねられ、旅行と政治が好調である中で文学と政治の関係について、1921 年の上海について多くの研究が欠如しており、訪問者がどちらに影響を受けたのかも明確ではない。メディア関係についてで、毎日新聞社による案内や芥川龍之介の本心、李人傑への影響、西洋への関心と読みたい欲求に焦点を当てた。五島慶一氏は、中国の参考文献の訂正についても補足した。さらに、現在の報道に関する自分たちの活動について言及し、地方に社会的な文脈で政治と文化について、どんなことがあったら良いかを尋ねた。文体に関しても、新聞や文化などの文書において、ある種の文句を拾い上げており、これが状況に対する意見を出している可能性について触れた。

2 日目午前【研究発表】

第Ⅰ部・第Ⅱ部

報告　市川裕見子

大会二日目の午前中は、会場は前日もメインに使われた、上海外国語教育出版社 10 階会議室一室に絞られ、第Ⅰ部、第Ⅱ部と分けられて計四名の個人研究発表が行われた。高機能の装備を施した大会議室に茶菓などアメニティーも添えられて、多く入れられた椅子に聴き手のびっしりと集う中、大会の二日目はスタートを切った。

二部で構成される四つの研究発表は、第Ⅰ部が宮崎尚子氏（茨城大学）の司会のもと、五島慶一氏（熊本県立大学）の「芥川龍之介・菊池寛と毎日新聞社　―『サンデー毎日』創刊前後まで」

と、管美燕氏（長榮大学）の「芥川作品における「良平」と「彼」の意図の考察」、第Ⅱ部が、孫立春氏（杭州師範大学）の司会のもとでの藤原まみ氏（山口大学）の「芥川龍之介のフランス小説翻訳」と、傅玉娟氏（浙江伝媒学院）の「芥川龍之介と木下杢太郎の北京イメージ」であった。

いずれの発表も、今大会のメイン・テーマである「芥川と上海」からは少し離れ、角度を変えたテーマを扱って、われわれの視界と関心を伸びやかに拡げてくれる役割を果たした、大会二日目午前中にふさわしい発表群だった。

五島慶一氏のご発表は、1918 年 2 月に始まる、大阪毎日新聞社と、特別社員となった芥川龍之介との関わりを、氏の関与する研究プロジェクト「週刊誌『サンデー毎日』の研究」での成果を取り入れ、毎日新聞の社史を始めとする歴史資料や随筆、書簡、関係者の証言を参照しつつ、その前後関係を明らかにしてゆく、つぶさな実証研究の実を挙げたものだった。

続く管美燕氏のそれは、芥川の作品『トロッコ』（1922）を扱い、作中での主人公の呼び方が「良平」という呼称と、「彼」という三人称の交互に現れることに着目して、名前で呼ぶのはその特定の人物に対する関係性の近さ、親近感を示し、三人称「彼」は人物を客観視し、一定の距離感を生む、という言語上の特質の観点から、芥川が作品において主人公の主観的視点（「良平」の呼称）と、彼を取り巻く環境や読者を含む他者との関係性を取り入れた視点（「彼」の人称）を交錯させて、鑑賞者、読者の作品への参加を誘い、それが小説的効果をもたらした、と分析した。

休憩をはさんで続く藤原まみ氏のご発表は、芥川の初期フランス文学翻訳作品『クラリモンド』を扱ったものだった。これはテオフィル・ゴーチェの“La Morte amoureuse”（1836）をラフカディオ・ハーンの英訳“Clarimonde”（1882）から重訳したものであることは定説となっているが、氏はこの翻訳作品に先行する、同じく英語からの重訳作品『バルタザアル』（1914）（原作はアナトール・フランス作“Balthasar”）の、フランス語原語、英語訳、他翻訳者の日本語訳、芥川の日本語訳の四つを比較対照して各々の文章の特質を炙り出し、その成果を踏まえて、『クラリモンド』についても同手法で一部の文章の仏原文、英訳、ハーン以外の英訳、芥川訳、芥川以外の日本語訳の六種の文章を比較対照して分析を行い、特質の抽出を試みられた。

最後に傅玉娟氏が発表されたが、氏は当時の日本人にとって「支那の模型」であり、「それを了解すれば支那の過半が了解できる」とされた北京の街について、芥川龍之介と木下杢太郎の二人が訪問者として北京に抱いたイメージを探った。結論として、芥川が各方面で衰えた都市北京のイメージを紀行文において喚起したのは、同時代の日本人の間に流通したオリエンタリズム的な支那趣味、中国賛美を剋し、北京の現実に目を向けさせる意図のあったものとし、杢太郎のそれは、清朝は中国文化の退化期である、というこれまた当時流布していた日本人の言説に抗して、中国、蒙古、中央アジアの要素の浸潤する文化融合の特徴ある都会を描き出しており、芥川、杢太郎それぞれが近代日本知識人の同時代言説にとらわれない、作家としての独立精神の煌めきを見せたとした。

2 日目午後【研究発表】

第Ⅲ部・第Ⅳ部

報告　五島慶一

二日目午後はプログラム第Ⅲ部として個人発表二本、第Ⅳ部としてパネル発表②の一本が行われた。

初めは劉 佳氏による個人発表「国境を超える芥川龍之介の上海の旅 「南国の美人」を中心にして」であった。タイトルからはそれと分からないが、本研究の主な論及対象は「上海游記」原作を脚本の渡辺あやが大胆にアレンジしたドラマ「ストレンジャー～上海の芥川龍之介～」（制作・放映NHK、2019 年）である。ドラマオリジナルの登場人物「ルールー」の意味づけと、彼の存在によって／あるいは彼との関りを通じて「私」が「傍観者から同行者への移行」を果たす――即ち「単に出来事を観察する立場から、他人と共に行動し、関わり合い、未来への希望を抱く人物へと成長する過程」がドラマには描き出されている、というのが本発表の最も中心をなす主張であるかのようだ。

「かのようだ」と記したのは、報告記筆者としてはそこが本発表における一番の力点、かつ論としての展開可能性がある箇所と認めたためであるが、実際の発表では他にドラマにおける同時代上海の再現性であるとか、原作には出てこない、一方でドラマでは象徴的に重要な意味を果たす女性たちの存在、「湖南の扇」からとった人血ビスケットの意味など、様々な要素に次々と言及されるために却って発表の焦点が摑み難くなっている上、それら要素がドラマの方のものであるのか、はたまた原作のそれについてなのかがよく分からないという難点を含んでいたためである。広く目配りを行うことはよいが、単に目を配ったという痕跡を残しただけでは学術発表としては不充分であり、それらを取り込んだ上で最終的に論者として何を主張しようとするのか、その主軸が分かるような論及の仕方が求められる。

前年の東京大会（二〇二二年・第十七回大会）で同じ素材を基に発表を行った邵若晨氏から聾唖者のルールーと中国話語が理解できない作中「私」との重なり合いについて、秦剛氏より発表副題の意図について、足立直子氏からアダプテーション研究における留意点について、それぞれ質問・指摘があった。いずれも重要な点であるので、大学院（研究）生である発表者には特に今後の研究に活かしてもらいたいと強く思った。

発表二本目は髙橋龍夫氏による「「上海游記」等におけるレトリックの意義と芥川のスタンス」である。冒頭で、発表者は現在芥川の伝記を執筆中であり、その余滴としての今回発表であるとの説明があった。熊本出身ながら中国大陸で四十年近くを暮らして諜報活動に従事、芥川訪中時には日本の対中政策の一環として創設された東方通信社の社長であった宗方小太郎（1864～1923）の日記には、芥川に関わる記載が三度出て来る。一九二一年三月の彼の上海到着直後、現地案内者となる村田孜郎（大阪毎日新聞社上海支局員。同支局長も務めたが、後に紹介する楊中奕氏の今回の発表に拠れば芥川来訪の時点では未だその地位にはなかったという）に伴われて芥川が宗方を訪問、また芥川の体調悪化による静養中に今度は宗方の方から面談に赴いたりと、数次に亙る両者面談の機会があったにも関わらず、芥川の側の記録即ち「上海游記」には宗方の名が拾われていない。その名の記載が無いという事自体に対しては既に先行論に指摘があるが、本発表

はそのことの意味を更に掘り下げ、芥川「上海游記」の表現に籠められた彼の意図を探る一助にしようというものであった。他にも芥川友人であったトーマス・ジョーンズや、芥川が現地面会する革命家・李人傑（李漢俊　1890～1927）など、調査から浮上する周辺の関係人物に関する伝記事項に関する通説の修正・再指摘及び「上海游記」中での表象に対する新たな意味づけなどがあり、余滴というにはそれ以上に豊富な内容を持った興味深い発表であった。

髙橋発表の内容・素材的には前日行われたパネル発表①、そしてこの後紹介するパネル発表②とも響き合う。同①の中で、2016年に上海人民出版社から刊行された宗方日記の記載を基に発表を行った何荷氏に拠れば、宗方小太郎のことは、この（2023年）夏の中国における日本文学研究界でも話題になった由の発言があった。何氏から宗方日記への着目の理由を尋ねられた高橋氏は、きっかけはある種の偶然からの発見で、まさかそこに芥川に関する記載があるとは当初思わなかったため大発見だと思っていたため、それが一足早く中国側で話題になっていたとは驚いたと応答した。それに対して何氏は、しかし中国でもそれが注目されるようになったのは最近のことであるとの補足があった。以上のやり取りからは、改めて虚心坦懐な態度による資料調査と共に、継続的な研究者間の国際交流強化の必要・重要性それぞれを改めて強く感じさせられる。

他にはこの部の司会である堀竜一氏から、発表の中にあった芥川の庶民への眼差しについて確認があった。一つ前の劉氏の発表に出て来る「同行者」という概念規定にも通じる事柄で、そこにも今回の大会を貫くテーマである芥川の上海体験とその記述という問題設定、その射程の広さを実感した。

直前に述べた二点、即ち今回のテーマ設定の幅の広さと、研究者間国際交流・資料調査徹底の重要性をより強く、プログラムの最後に感じさせたのがパネル発表②「芥川の上海旅行：「上海遊記」の検証及び作家の上海表象をめぐって」であった（以下に於ける「遊記」表記は原文・原タイトルのまま）。初めに、会場校の先生方の中心として、今回の大会全般にお心配りをいただいた高潔氏からパネルの趣旨説明があった。重要な情報を含むので予稿集に掲載された趣意文の第一段落をそのまま引用し閲覧に供したいと思う。

> 2022 年度の春学期に、ちょうど上海がロックダウンの時期と重なっているので、はっきりと覚えているのですが、博士前期課程の院生の“中日比較文学”授業で、芥川龍之介「上海遊記」と横光利一『上海』を取り上げて、講義をしました。それと同時に、四月末から六月の下旬まで、東京女子大学大学院和田博文先生のゼミと合同演習を行いました。一回の説明会と計五回の発表会に、東京女子大学から 4 名の院生、上海外大から 5 名の院生が参加しました。

更に、「合同演習の目的は「上海遊記」のコンテクストを、同時代の日本と中国の一次資料から読み解くこと」であり、今回、パネル発表に参加した冷　和華氏、張　青氏、楊　中奕氏はいずれもその合同演習への参加者とのこと。そして「本日のパネル発表では、合同演習の発表をさらに発展させて、芥川が上海訪問前後の上海事情を検証し、上海を舞台にした中日両国の交渉史の一断面を、「上海遊記」のコンテクストに即して読み解いてみること」を試みたという。パネルはそれに、芥川

の帰国直後の作である「母」(『中央公論』一九二一年九月)に対して「越境体験、都市表象、ジェンダーなどの視点からアプローチを試み」た上海師範大学教員の周　倩氏の発表を加えて構成されたものであるという。

上海外語大学に所属する大学院生のうち、冷氏は現在(合同演習を行った先である)東京女子大学に留学中ということで、東京からの中継による発表であった。この大会自体が上海外語大を会場にしつつ中継も入るというハイフレックス方式で開催されていることといい、近年の技術の進化には舌を捲きつつそれが可能としたことに対しては大変有難く感じる。尤も、その実現のために準備段階から、のみならず大会開始後にも、大会実行委員諸氏と会場校関係者には非常に苦労をお掛けすることになり、更に会員によっては接続処理に大変な手間と時間がかかったという。単に技術面だけではない問題もそこにはあったことも会務委員長としては耳にしているが、兎に角通信や交流の可能性においては一〇二年前にはできなかったことが実現しているのは確かであり、だからこそ、より研究者の交流の途が平坦に開けるよう政治は環境を整えてもらいたいと強く願う。

発表内容紹介に移る。冷氏の発表「『上海游記』に登場したカフェから見た上海の「場違い西洋」」は、上海におけるカフェを、その始まりから一九二〇年代までの展開の様子を中心に、同時代のガイドブック等から調査したものである。芥川が訪問した一九二一年までの数年間に発行されていたガイドブックに関して、それが主に誰に――即ち中国人、西洋人、あるいは日本人のいずれに向けられた案内であるのかを軸に整理・分析したところがポイントで、「上海游記」全体を貫く、その地に対する「場違い西洋」という芥川の視線・認識の一端が、彼が訪れた当時の上海におけるカフェの在り方から見えて来るという内容であった。

張氏の発表「芥川龍之介が見た中国の「文人生活」――「上海遊記」と「江南遊記」に関する一次資料を中心に――」は、芥川が上海で面談した文人政治家の鄭孝胥の邸宅と、「江南游記」で若干言及される(「六　西湖(一)」)杭州の兪楼(清末の古典学者である兪曲園の別荘)に関する同時代実態調査報告である。特に前者に関して、当時鄭が上海市内に二軒の家を所有しそれらを日常的に往来していたこと、うち芥川が訪問した方の「海蔵楼」は広大な敷地に豊富な植栽を有する立派な邸であったことを鄭の日記などから明らかにし、「上海游記」に記された芥川の感懐に繋げた点は説得力があった。

いずれも、中国に残る、あるいは中国において復刻出版された資料から芥川訪問時の光景を復元しようという試みであり、地の利を大いに活かし、且つそのようにして〈発掘〉した一次資料の読み込みに関しては十二分に労力を懸けたことの伝わる好発表であった。

続く楊氏の発表「芥川龍之介と東亜同文会との接点――『上海遊記』を中心に――」は、芥川の上海に於ける滞在、特に鄭孝胥・章炳麟といった政治家との面談の場を設定・扶助した村田孜郎・波多博・西本省三をはじめとする現地在留日本人の役割や位置づけに関して、その出身や所属組織を巡るネットワークの面から先行論を踏まえつつ再整理と適宜に新たな意味づけを行った力作。ここでも中心に位置付けられるのは先の発表でも登場した宗方小太郎である。上海に於いて芥川が特に強く交流した、先述の日本人三名はいずれも東亜同文書院の卒業生であるが、宗方はその母体である東亜同文会の主要メンバーであった。発表では更に一八七〇年代にまで遡り、

主に人的繋がりの面から同会の歴史的背景についても言及される。発端として記されたのが「熊本国権党」の有力政治家であった佐々友房という点も個人的に大いに興味をそそられた。即ち、佐々が熊本において興した私学校「濟々黌」(「同心学舎」の後身)に宗方が入学、明治十七(一八八四)年に佐々に従って彼が上海に渡ったことが、その後の同地に於ける種々の団体との関りの始発であるというのである。

先にも指摘した資料の発掘と読み込み、そしてここでは更にそこから、当該事項の自身なりの再布置という手続きが加えられており、今回このパネルを構成した上海外国語大学大学院生諸君の——しかも彼女らはいずれも修士課程在籍者であるという——学力の底深さを強く感じた。眼を転じると、日本ではかなり以前より学部から大学院への進学者減少が言われ、学部でゼミを持つ者の実感として実際それは強く感じるところである。更に、あるいはその結果として、日本近代文学関聯の学会、特に私の所属する地方支部の大会や機関誌を見ると近年は毎回発表・投稿者の過半、回によってはその大半が留学生・海外出身者(今は特に中国からが多い)だったりもする。今回の大会でも、経済的問題など他の様々な事情が強くそこに絡むことも重々承知の上でしかし敢えて言えば、日本出身の若手研究者の発表が皆無であったのは少しばかり残念であった。日本の政治や社会一般が研究というものを、そして文学をここまで軽んじる(今や学校教育からもそれは外されようとしている)以上、若手研究(志望)者の減少は当然の帰結と言えるが(私も指導の学部生に、将来性の見通せない研究の途へと安易には勧誘することが出来ないでいる)、一方に寂寥たる思いを強く抱かざるを得ない。これは別に国粋的な発想から述べているのではない。今回の各種研究発表を通じて、この学会もその成果という面から言っても真に「国際」性を帯びるに至った点は素直に慶びたい。同時に、日本文学が日本で、あるいは日本人(ここで明確な定義をするには及ばないかと思うが、ひとまず日本語を母語とする日本出身者を想定している)によって全く行われなくなるのは寂しい。もし仮にそのような事態になって仕舞ったら、真の「国際化」からは逆の方向にまた離れた結果であると思うからである。

感慨序でにもう一つ余計なことを。先に佐々友房に個人的興味を感じたと述べたが、実は彼の興した濟々黌は現在も熊本市内に普通高校として存在している。県立ながら学校のトップに「黌長」、学校歌として「黌歌」を擁する一種独特な校風で知られ、私のような非熊本出身者の眼には以前から異に映っていたのであるが、今回改めてその機会を得て同校の沿革を振り返るとさもありなんと思うと共に、そこから宗方のような人物が輩出？されたことにも合点がいく。志学の方向性はおよそ異なるが、今回私も勤務先の熊本県立大学からゼミ院生の中国出身留学生を同道した(というより、現地についてからは芥川宜しく殆ど手引してもらった)こと、また上海での我々の宿泊先ホテルに偶然「熊本熊的家」(“くまモン”ルーム)があったことなどから思わぬ縁を感じた次第である。

紹介に戻ると、掉尾を飾る周氏の発表「芥川龍之介の上海——「母」を中心に——」も芥川が訪れた時点での上海の様子、特に当時その地に於ける在留日本人社会の在り方を確認し、そこから作中〈世界〉・設定に繋げようとするものである。但し、先の大学院生による三本の発表がいずれも同時代上海の実景や組織、人脈的あり方の実態把握に足場を置いていたのに対し、本発表はより作品の内部世界に沈潜、平明に言えば作品解釈に足場を置いたものである。予稿集所載の発表

原稿中、「5.終わりに」に示された纏めが発表の狙いをよく示しているので以下に抜粋する。

> ここまで芥川龍之介「母」において、赤ん坊を亡くした母が、自己分裂から自己統一へ、抑圧から解放へと向かうさまをみてきた。それはじつに複雑な女性の心理だが、芥川はこの小説に中国から持ち帰った上海、あるいは蕪湖の印象を重ね、彼らしいフレームワークの中に落とし込んでいる。(中略)「母」の舞台は、上海という都市でしかありえない。また旅館の部屋に住む夫婦も、やはり上海の租界に住む日本人の、仮住まいのような生活と重ねられているように思われる。一言にいえばこの小説は、「外地」としての上海をひとつの病理として描いたものなのである。

但し、実際の発表に於いては、予稿集読み上げの形で行われたものの中途で時間切れのため、原稿第三節までしかお話しされなかった。そこまでではやや発表の意を十全に酌むことができないと考えたため、今回は敢えて後の部分から引いている。予稿として提示されたものを見る限り、興味深い論として成立しうるのではないかと思われる。

このパネルの司会はやはり上海外国語大学の呂　慧君氏が務めた。氏は上海知識人社会における重要な拠点であった内山書店、その店主たる内山完造の研究に従事されているとのこと(内山書店は我々も翌日のフィールドワークで見学した)。冒頭の趣旨説明から四人の発表、そしてコメンテーターである本会初代会長・宮坂覺氏の御発言まででほぼ規定の時間となり、会場との間での質疑の時間が殆ど取れなかったのは残念ではあったが、全体的内容には充分満足のいくパネル発表であった。

フィールドワークⅠ・Ⅱ

報告　堀　竜一

フィールドワーク1日目(10 月 30 日(月))

午前

2日間の国際芥川龍之介学会上海大会の後、10 月 30 日から 11 月 1 日まで、3日間にわたり、フィールドワークを行った。1日目と2日目は上海市内、3日目は蘇州である。ここでは、フィールドワーク1日目と2日目について、報告を行う。

上海市内でのフィールドワークは、当然ながら、「上海游記」に記された場所を始め、上海での芥川龍之介の足跡を辿ることが目的である。

中国支部長・秦剛先生が3日間のフィールドワークを綿密に企画してくださり、秦先生始め、劉東波さん、張東悦さん、邵若晨さんたち中国側の参加者が、懇切にガイド役を務めてくださった。ここに感謝を記しておきたい。

フィールドワーク中、秦先生は1冊の本を手にして、ガイドを務めてくださった。それは木之内誠編『上海歴史ガイドマップ　増補改訂版』という本である。帰国後、その本を取り寄せ、フィールドワ

ークで回った場所を紙上で詳しく辿り直してみた。以下、同書の表記に従い、地名などを日本語表記する。

1日目・2日目ともに、宿泊先の白玉蘭賓館（虹口足球場店）から、朝、貸切りバスに乗って出発した。総勢 20 数名の参加者である。

1日目の午前中に訪れたのは多倫路文化名人街周辺、乍浦路周辺である。今回、大会が開催された上海外国語大学のキャンパスは、虹口（ホンキュウ）区の北方、大連西路を挟んで魯迅公園の北に位置している。魯迅公園は、「上海游記」〈十二　西洋〉で「新公園」として登場している。魯迅公園の少し南方に位置するのが、多倫路文化名人街である。芥川の足跡と直接関わるわけではないが、まずは魯迅関係地を巡った。魯迅は 1927 年に上海にやって来て、1936 年に亡くなるまで、このあたりに居住した。魯迅故居（最後の住まい）、魯迅寓所とされる場所が何箇所か残されている。フィールドワーク一行は、魯迅のよき理解者であったと言ってもよいだろう内山完造の書店・内山書店旧址から始め、拉摩斯公寓（ラモス・アパート＝魯迅寓所）を見学、そして多倫路文化名人街に入り、鹿地亘旧居、上海左翼作家聯盟会址紀念館などを見て回った。多倫路文化名人街は、かつて、魯迅を始め、郭沫若、茅盾ら著名人が住んでいた地区で、1999 年にプロムナードとして整備された。近くの余慶坊では迷路のような路地で金子光晴寓所を探った。

次に海寧路地区の乍浦路周辺に移動した。蘇州河以北の虹口区は、戦前・戦中、数多くの日本人が居住し、「日本租界」とも称された地区である（上海全体で 10 万人を越え、大部分はここに居住した）。一行は、西本願寺、本圀寺から、日本人経営の旅館・ホテルが集中した現・武進路住宅、かつて上海毎日新聞のあったあたりを散策した。この周辺には、他にも日本旅館・ホテル、商店街などが建ち並び、大阪毎日新聞・東京日日新聞（芥川はその視察員として中国を訪れた）、その他、日本の新聞社の上海支局がこのあたりに置かれていた。映画館もこの周辺に集中していた。現存する勝利電影院 Victory Cinema の前を通り、乍浦路を南下した。かつての東和劇場の南側の路地（会元里）に入り込み、武田泰淳の寓居跡を確かめた。武田泰淳は 1944 年6月に上海に渡り、戦後まで上海に留まった。当初は愚園路の福世花園（F 園）に住んでいたが（一時、堀田善衛も同居）、日本の敗戦後、上海始め中国各地の日本人が虹口区に集められ、武田も乍浦路に住むことになったのである。

乍浦路から少し南東に行ったところに里見医院がある。芥川は上海に到着後、すぐに乾性肋膜炎を患い、この病院に3週間近くも入院した。この間の経緯は「上海游記」〈五　病院〉に描かれている。かつてのこの病院の外観は、『新潮文学アルバム　芥川龍之介』などで目にしていたが、今もほぼそのまま（？）残っている（「上海游記」にしばしば描かれる、上海に特徴的な（？）赤煉瓦3階建の建物である）。この病院のすぐ近くに、萬歳館の建物が残っている（こちらも、赤煉瓦3階建の建物）。「上海游記」〈二　第一瞥（上）〉によれば、上海到着後、当初芥川は東亜洋行というホテル（実際には「東和洋行」）に宿を取るはずだったが、満足できる部屋が空いていなかったため、萬歳館に宿泊することになったという。このあたりは黄浦江の埠頭からすぐの位置にあり、日本人経営の旅館や医院が多く、日本人倶楽部も置かれていた。

午後

虹口区嘉興路街道瑞虹路の瑞虹天地太陽宮というモールに入っている小籠包のレストランで昼食を取り、午後はまず、北外灘地区に向かった。そこで陳祖恩先生と合流し、陳先生の案内で北外灘地区を歩いた。陳先生は上海の日本人の歴史についての専門家で、日本語でも著書を刊行されている方である。

北外灘というのは、黄浦江と蘇州河の合流地点の北側の黄浦路のあたりである。かつては、埠頭の北側にドイツ領事館、米国領事館、日本総領事館が建ち並んでいた(ロシア領事館は現存)。日本郵船会社もかつてここにあり、門司から筑後丸に乗った芥川はこの埠頭に降り立ったとのことである(「上海游記」〈二　第一瞥(上)〉冒頭に、この埠頭の様子が書かれている)。

次いで、黄浦路から、右手に上海大廈(かつてのブロードウェイ・マンション)を望みながら、外白渡橋(かつてのガーデンブリッジ)を渡り、外灘(ワイタン)地区に向かった。「上海游記」〈二　第一瞥(上)〉で、埠頭から馬車に乗った芥川が、「鉄橋の架つた川の側に出た」という「川」が蘇州河、「鉄橋」がかつてのガーデンブリッジで、芥川はそのまま蘇州河の北岸を、現在の河南路橋のたもとにあった東和洋行まで馬車を走らせたものと思われる(結局、馬車を戻す形で萬歳館に向かう)。

欧米風の荘重な建築群が立ち並ぶ外灘は、旧租界の中心地であった。黄浦江に面した河岸通りはバンド Bund と呼ばれ、現在も上海の最も代表的な観光地である。外白渡橋を渡った左手(黄浦江と蘇州河の合流点の南岸)が黄浦公園で、かつてのパブリック・ガーデンである。この公園については、「上海游記」〈十二　西洋〉でも、「外国人ははいつても好いが、支那人は一人もはいる事が出来ない。しかもパブリツクと号するのだから、命名の妙を極めてゐる」と皮肉っぽく書かれている。「犬と中国人入るべからず」と掲示されたというが、〈十四　罪悪〉には「身なりの悪い露西亜人」(書簡には「シベリア辺から流れこんだ碧眼の立ん坊」)の姿が描写されている。横光利一『上海』の冒頭の場面は、このあたりだろうか。このような、中国人立ち入り禁止の場所は、旧租界のあちこちにあったようである。

一行は、陳先生の案内で、バンドの歴史的建造物を見て歩いた。とくに、旧・横浜正金銀行(「上海游記」〈二十一　最後の一瞥〉に登場、ただし、現存の建物は 1924 年竣工なので、芥川が目にした建物ではない)、台湾銀行、三菱銀行、三井銀行、住友銀行などの、日本資本による銀行や、日清汽船上海支店(現・上海海運(集団)公司)などの重厚な建築物にじかに触れることができた(いくつもの建物の正面両脇に、一対の阿吽型の獅子(ライオン)が据えられていた)。

「上海游記」では、バンドはあまり登場せず(〈二十一　最後の一瞥〉にわずかに名称が記される程度)、外灘では、もっぱら、三馬路・四馬路(スマロ)に多くの記述が割かれている。三馬路は現・漢口路、四馬路は現・福州路で、芥川が書簡で「上海の銀座通り」と称する南京路に並行した南側の通りである。三馬路・四馬路もまた、現在と同様、芥川の時代も繁華街で、茶館(喫茶店)、劇場、妓院などが密集する地区であった。その中でも、芥川は「上海游記」〈九　戯台(上)〉で天蟾舞台での、〈十　戯台(下)〉では亦舞台での、京劇観劇について詳しく記述している。また、〈十五　南国の美人(上)〉では小有天(福建料理)、一品香(大型旅館)、雅叙園、杏花楼(広東料理)といった料理店、そして妓女について詳しく語っている(「手帳6」にも記載あり)。入院前の〈三　第一瞥

（中）〉には、このあたりのシエツフアアドという料理屋、カツフエ・パリジアン（旧フランス租界に入ったあたり）の名も上げられている。一行は、小有天、青蓮閣（茶館、遊芸場）、天蟾舞台（現在は天蟾逸夫舞台）の外観を眺め、ここで陳先生と別れ、豫園へと向かう。

「上海游記」〈六　城内（上）〉から〈八　城内（下）〉にかけてが、豫園を訪れた際の紀行文である。「上海の城内」とあるが、豫園は外灘の南、旧フランス租界の外側に位置する、旧県城内の庭園であり、外灘と並び、上海の最も代表的な観光地である。豫園の敷地内に老城隍廟が祀られている。この旧県城は、明代に倭寇の襲撃に備えて、城壁が築かれたという。現在もわずかに旧城壁が残っているとのことである。豫園と、それに隣接する土産物屋等商店街は、とりわけ観光客でごった返していた。一行が豫園に到着したのが夕方遅かったため、老城隍廟は見学できず、残念であった。芥川は湖心亭、城隍廟、さまざまな露天のことなどを記してはいるが、あまり良い印象は持てず、「詩文にあるやうな支那」ではなく、「現代の支那」、「猥褻な、残酷な、食意地の張つた、小説にあるやうな支那」の印象を強調している。

１日目のフィールドワークを終えて、一行は、旧フランス租界内、淮海中路の少し南、瑞金二路と復興中路の交わる所に位置する上海瑞金洲際酒店で、豪華なバイキングの夕食を取り、ホテルに戻った。

フィールドワーク2日目（10 月 31 日（火））

午前

フィールドワーク2日目も、宿泊先の白玉蘭賓館（虹口足球場店）から出発したが、この日は蘇州に移動・宿泊するため、また、ここで別れるメンバーもいたので、ホテルのチェックアウト終了後、ホテルのロビーに設置されていた学会大会の看板（くまもんの看板も置かれていた）と一緒に記念撮影を行った。

午前中は、まず、魯迅公園の中にある魯迅紀念館、そして、魯迅の墓を訪れた（魯迅紀念館が月曜日休館のため、この日に日程変更となった）。魯迅公園は、池に沿って南北に長く延びた、割合に広い公園である。先に記したように、芥川が上海に来たころは、この公園は「新公園」と呼ばれていて、芥川も訪れたようである。芥川の中国旅行の翌年 1922 年に「虹口公園」となり、1988 年に「魯迅公園」と改称された。魯迅紀念館は、当初、この公園の少し南方、フィールドワークで前日訪れた内山書店旧址から少し北の山陰路、旧・大陸新邨の魯迅故居に開館したものが（堀田善衛が戦後住んだ緑苑荘はこの近く）、1956 年にこの公園内に移され、1999 年に新館になった。ここで魯迅に関する展示を興味深く拝観したが、あいにくミュージアムショップがなく、記念品が買えなかったのは残念である。紀念館を出て、公園内の少し離れた所にある魯迅墓に詣でた。もとは、1936 年の魯迅没後、虹橋の方にある万国公墓に置かれたのが、1956 年にここに改葬された（堀田善衛『上海にて』に「魯迅の墓」という一文が収められている）。籐椅子に座った魯迅の像が置かれ、奥手に巨大な墓碑が設置されていて、「魯迅先生之墓」という金文字が彫られている。この文字は毛沢東の書で、一目で毛沢東の手になるものだとわかるとのことである。この敷地内で、お年寄り（？）のグループが太極拳を行っていた。火曜日の朝ではあったが、ここだけでなく、公園内のあちこち

で、グループごとに太極拳やダンス、コーラスなどを行っていて、日本にはない習慣（？）だと、微笑ましく思った。

次いで、中国共産党第一次全国代表大会旧址（李人傑住所）、中国共産党第一次全国代表大会旧址紀念館を見学した。ここは新天地と呼ばれる地区で、太平橋公園に隣接した一画である。旧址は旧上海の石庫門住宅を再利用した商業娯楽施設とのことで（こちらが北里、これとすぐ向かいあった南里に紀念館がある）、迷路のような路地を進み、李人傑住所を訪れた。1921 年7月 23 日に、中国共産党第1回全国代表大会が、北里の旧式石庫住宅の応接間を会場に開催された。その住宅が李漢俊（人傑）の住居である。

芥川は上海で、章炳麟（太炎）、鄭孝胥（蘇戡）といった有名な老大家に加え、若き李人傑とも面会している。この三人との面会の様子は、それぞれ、「上海游記〈十一　章炳麟氏〉〈十三　鄭孝胥氏〉〈十八　李人傑氏〉に描かれている。李人傑との面会当時、芥川は手帳に「李氏は年未二十八歳、信条よりすれば社会主義者、上海に於ける「若き支那」を代表すべき一人なり。」（実際には、このとき 31 歳）と記し、「小づくりの青年なり。やや長き髪。細面。血色は余り宜しからず。才気ある眼。小さき手。態度は頗る真摯なり。（…）」と人物の印象を書きとめたという（章瑋さんが「手帳6」を翻刻した「芥川龍之介「手帳六」考続貂　附図版・翻刻・略注・筆記用具一覧表ー「奇遇」との関係を起点にしてー」にも、「李人傑」の名前のみ記されているが、このような記載はない。この手帳はどこに行ったのだろうか）。李人傑との会見の様子は、NHK で 2019 年末に放送されたドラマ「ストレンジャー～上海の芥川龍之介～」でも再現されている。ドラマで使われている会見の部屋は、一行が旧址で見学した部屋よりも幾分広いようだが、非常によく雰囲気を再現している（ドラマでは章炳麟、鄭孝胥との会見の場面も再現されている）。旧址の部屋の壁に、李人傑の家族写真や、拡大した李人傑の顔写真が飾られていた。眼光鋭い、明晰な頭の持ち主といった印象である。芥川が李人傑と会った 3 か月ほど後に、ここで、中国共産党第1回全国代表大会が開かれ、当の李人傑も、毛沢東も参加し、中国共産党結党宣言を行ったわけである。〈十三　鄭孝胥氏〉で「誰でも支那へ行つて見るが好い。必一月とゐる内には、妙に政治を論じたい気がして来る。」と述べられている。芥川が上海で取り憑かれた（？）「多少正気ではな」い「逆上」、「熱」を、ここでぼんやりと思い描くことができた。

旧址の向かいに、ごく近年（100 周年の 2021 年？）建てられたという中国共産党第一次全国代表大会旧址紀念館がある。紀念館には、中国共産党第1回全国代表大会に参加した 13 人の代表の横並びの立像があり、圧倒される。

午後

北里の一角にある日本料理店で昼食を取り、午後はまず、重慶南路を越えて復興公園を通り抜け、孫中山故居紀念館に向かう。

このあたりは、鬱蒼とした街路樹の並木が続き、まるで森の中にいるようである。まさに、芥川は「上海游記〈十二　西洋〉で、仏蘭西公園の「若葉を出した篠懸（すずかけ）」を描いている。この仏蘭西公園が、孫中山故居紀念館に隣接する現・復興公園である。上海は至る所にこのような街路

樹の並木が見られる。〈十八　李人傑氏〉にも「青青たる街路の樹」とあるが、上海の街路樹に多いのは、芥川が記す篠懸のようである。上海の街路樹については、フィールドワーク参加者の間でも話題になった。篠懸はプラタナスのことだが、法国梧桐、フランス青桐のようでもある（篠懸・プラタナスと梧桐・青桐は別の種類のようだが）。〈十九　日本人〉では、漢口（ハンカオ）のバンドの篠懸の並木（ここは、南陽丸船長・竹内氏の話）が言及され、「北京日記抄」などでは、合歓（ねむ）や槐が北京を特徴づける街路樹として頻出する（「手帳6」には、「漢口のバンド。プラタナス。アカシア。（支那人不可入）芝生。（…）」とある）。

さて、孫文（孫中山）は三民主義を主唱し、1911 年辛亥革命により清朝を倒し、中華民国を樹立した革命指導者の一人である。このあたりに、孫文ゆかりの建物が3箇所あるようである。孫文行館、孫文寓所、そして孫中山故居である。今回一行が訪れた孫中山故居紀念館は、孫文が 1918 年から 1924 年まで住んだ住まいである（妻の宋慶齢は孫文の死後も 1937 年までこの家に住んだという）。芥川が仏蘭西公園（現・復興公園）まで足を延ばした際、孫文に会ったわけではなく、「上海游記」にも孫文に関する記述はない。芥川が孫文にわずかに言及しているのは、「湖南の扇」の冒頭で、「目ぼしい支那の革命家は（…）いづれも湖南に生れてゐる」、その例外として、広東生まれの孫逸仙（孫文のこと）に言及している程度である。

孫中山故居紀念館からバスで徐家匯に移動し、光啓公園を訪れた。ここには徐光啓の墓がある。旧フランス租界の西の外れあたりに位置する徐家匯は、徐光啓ゆかりの地であり、1843 年の上海開港後、イエズス会が礼拝堂等の諸施設を建てたという。徐光啓は明代の政治家・科学者で、カトリックに入信、宣教師マテオ・リッチと親交を結んだ人物である。徐光啓が亡くなったのは北京だが、1641 年生まれ故郷の上海に埋葬され、その場所が 1983 年に光啓公園と改称された。書簡によれば、芥川は日本領事館に徐家匯見物の許可を申請したものの、なかなか許可証が発行されなかったようである。「上海游記」〈二十　徐家匯〉で、明の万暦年間（1573-1619）、清の雍正年間（1722-1735）、中華民国十年（1921）の三つの時代の徐家匯の様子を、それぞれ二人の人物の対話を通して描いている。明の時代に建立された天主堂とその屋根の頂の黄金の十字架が、清の時代には、荒廃した礼拝堂と土にまみれた十字架へと変わり、芥川がここを訪れた中華民国 10 年には、麦畑の中の花崗石の十字架と、屹然と雲端を摩せる天主堂の尖塔とが復活（？）している。徐光啓がこの地に建てた天主堂は、芥川が思い描くような変遷を辿ったのだろうか。今でも、麦畑は見当たらないものの、天主堂の尖塔（徐光啓墓の背後に屹立する徐家匯天主堂の尖塔は、1910 年に建設されたもののようである）、花崗石（？）の十字架、石柱、石獣を目にすることができる。芥川が記している「明故小保云々」という徐光啓の墓の台座に刻まれた墓誌銘は、そのまま刻まれていた（秦先生に指摘されて、芥川の記述を墓誌銘と照らし合わせてみると、微妙に字句が異なっている）。このあたりは、抗日戦、文革で荒廃したとのことで、一行が目にした徐光啓墓も、芥川が目にしたそのままではなく、近年整備されたものなのかもしれない。

ここで上海のフィールドワークは終了して、日の暮れてきた中、一路、蘇州に向かう（この日はハロウィンで、上海でも仮装した人たちが街に繰り出している様子をバスの車窓ごしに目撃した）。途中、陽澄湖畔の漁宝飯店で晩餐の食卓を囲む。海鮮料理の豪勢な夕食であったが、中でもみん

なを大喜びさせたのが上海蟹であった。陽澄湖畔の店は、上海蟹のシーズンのみ開店するとのことであった。さらにバスで蘇州に向かい、深夜、南園賓館に到着した。

フィールドワークⅢ

報告　管美燕

フィールドワーク 3 日目（11 月 1 日（水））

上海は芥川龍之介が生涯で初めて訪れた海外の都市であり、百年後に再び上海で芥川文学の国際シンポジウムを開催することは、非常に意義深いことである。そのため、主催者は今回の会議の議程を慎重に計画し、二日間の学術論文発表に加えて、特別に三日間の上海・蘇州フィールドワークを企画した。北京外国語大学の秦剛先生、南京大学の劉東波先生、特別研究員として上海社会科学院歴史研究所に所属する陳祖恩先生のご案内のもと、北京外国語大学の大学院生張東悦さんと南開大学の大学院生邵若晨さんのご協力を得て、芥川が百年前に訪れた上海や蘇州の軌跡をたどった。五日間の充実した議程と踏査活動により、参加者全員が大いに満足している。二日間の対面とオンライン同時開催のシンポジウム、そして三日間の上海・蘇州踏査活動では、会場の手配や論文発表、特別講演、踏査ルートの企画や解説など、主催者の綿密な計画と丁寧な配慮が見受けられた。初めて上海を訪れ、台湾学者の唯一の代表として、筆者は今回の大会で多くの収穫を得たと感じている。

1921 年、芥川は人生で唯一の海外旅行に出発し、三か月以上にわたる旅程で上海、杭州、蘇州、南京、蕪湖、長沙、天津、北京などを訪れ、多くの貴重な史実記録や数多くの紀行文や文学作品を残した。芥川が上陸した最初の場所は上海であり、その後杭州、蘇州などを訪れた。1921 年 3 月に体調不良の芥川が上海の埠頭に上陸した際、中国に対する最初の印象は良くなかった。芥川の描写によれば、日本の車夫の「その勢の好い所は、何処か江戸前な心もちを起こさせる位なものである」が（「上海游記　二　第一瞥（上）」p.9）、上海の埠頭は「不潔」で、「怪しげな人相をしてゐる」車夫で混雑し、上陸したばかりの日本女性たちは「少からず不気味」に感じた（「上海游記　二　第一瞥（上）」p.9）。バラを売る老婆の強欲さは、芥川を「欲張り」で「図図しい」として不快にさせた（「上海游記　四　第一瞥（下）」p.16）。さらに、当時の中国が列強の勢力範囲内にあったことから、芥川が目にした上海は、先進と未開が入り交じり、現代と古典が対立する様相を呈しており、貧富の差も顕著で、まるで魔都のような都市だと芥川に感じさせた。芥川は実際に中国を訪れ、その現実を綿密に観察した。当時の文人や政治家との対話を丹念に記録し、彼らの視点から中国社会や文化について深く洞察しようとした。また、日本と中国の相互関係や歴史的背景についても研究し、その知見を自身の作品に反映させた。帰国後、芥川は一連の游記を連載し、また「母」（1921 年）、「湖南の扇」（1926 年）など中国の都市を舞台

にした小説も発表した。これらの作品は、芥川が中国での体験や観察から得た洞察を基にしており、当時の中国社会や文化に対する芥川の理解と関心を反映している。しかし、長らく『支那游記』は近代中国に汚名を着せるテキストと見なされてきたが、近年多くの学者の研究により、芥川の『支那游記』は単なる批判的な文書ではなく、むしろ当時の中国を日本の他者として捉え、同時に日本の社会や文化についても省察したものとして再評価されている。この再評価により、芥川の『支那游記』は学術界や一般の注目を浴びるようになった。

今回のフィールドワークは、芥川の当時の旅程に基づいて綿密に企画されたが、制限された時間のため、上海と蘇州の踏査のみに絞られている。参加者は毎日数万歩を踏破しながら、秦剛先生方の丁寧な日本語解説に耳を傾け、芥川が歩んだ街角や当時の人々との交流を心に描きながら、まるで 1921 年にタイムスリップしたかのような感覚に浸った。

フィールドワークの第三日（11 月 1 日）は、蘇州に移動し、孔子廟、留園、拙政園、寒山寺を訪れた。本節はその日に蘇州を実地踏査した際の見聞を主に記録したものである。

「江南游記」によると、当時蘇州を訪れた際、芥川は驢馬に乗っていた（p.247）。しかし、蘇州は上海とは異なり、街路が狭く、人通りが多い上、両側にまた店の看板が下がっているため、芥川が乗っていた驢馬は狭い街路を突っ切り、芥川を驚かせた。姑蘇城（蘇州の古名）に初めて足を踏み入れると、街路の両側には数軒の経師屋や宝石屋が並んでいた。経師屋には額装された山水や花鳥の絵画がいくつか陳列され、宝石屋には翡翠や玉が飾られており、どれも「姑蘇城らしい、優美な」雰囲気を醸し出していた（「江南游記　十三　蘇州城内（上）」p.248）。芥川はこれらの風景に心を奪われ、当時の蘇州の情景を存分に楽しむことができた。また、芥川が「姑蘇三千六百橋」とまで述べたように（「江南游記　十三　蘇州城内（上）」p.249）、姑蘇城の特徴の一つは、数多くの小さな橋があることである。筆者が目にした限りでは、実際の橋の数が明確ではないが、街を彩る小さな橋や流れる水、揺れる柳など、美しい景色は、現在でも蘇州独特の明るい風景を演出している。これらの小さな橋は、姑蘇城内を繋ぎ、風情豊かな散策を楽しむことができるだけでなく、歴史的な建造物や伝統的な街並みと調和している。訪れる人々にとって、姑蘇城の橋は、蘇州の文化と風俗を感じる貴重な場所の一つとなっている。

芥川は俳人の島津四十起とともに、蘇州の文廟に向かう途中、日が沈む頃に到着した。蘇州の文廟は、宋代に范仲淹によって建てられ、その設立目的が孔子を祀ることであったため、一般に「孔子廟」とも呼ばれている。范仲淹は、蘇州の州学と文廟を結びつけ、廟学という学問体系を確立した。この廟学は、当時の文化教育の中心地であり、蘇州の文化の象徴となっている。また、蘇州の文廟は江南地方でも屈指の美しさを誇り、その壮麗な建築や庭園は多くの人々を魅了してきた。

「江南游記」の記述によれば、芥川は廟前の道へ差しかかると、「寂しい路ばたの桑畑の上に薄白い瑞光寺の廃塔が見える。塔の一層一層に、蔦蘿やくさの茂つたのも見える」とあり、この風景に触れた瞬間、突然「滄茫万古」の感覚に襲われたと述べている(「江南游記　十五　蘇州城内(下)」p.253-254)。「滄茫万古」とは、時間の無限の広がりや過去の長い歴史を感じさせる言葉であり、この感覚は芥川にとって非常に深いものであった。特に、その荒廃された景観を見て、芥川はそれを当時の中国の荒廃と結びつけ、「この荒廃があればこそ、懐古の詩興も生」じ、「この滄茫万古の意は、幸ひにずつと裏切られなかつた」と述べている(「江南游記　十五　蘇州城内(下)」p.254)。芥川はこの荒れ果てた風景の中で、古い大国の伝統文化の衰退を見たように感じたと言っている。人気のない苔むした石橋を歩む際、芥川は日本の漢学者であり詩人でもある今関天彭の詩句を口ずさむことさえあった。「休言竟是人家国。我亦書生好感時。」というこの詩句は、自らがただの文人であり、古い大国の興亡に感嘆する一方で、他国のことには口を挟むべきではなく、沈黙を保ちながら観察と学習に専念すべきだという自覚を芥川に呼び起こした。その後、芥川は黒い礼門と石獅を通り抜け、一つの小さな門に入った。門の前には、貧相な服を着た女性と、顔中に吹き出物のある女の子が立っており、芥川は彼女らを少し気の毒に思った。彼女らが芥川を案内して戟門に入ると、そこには「天文図」「地理図」など有名な石碑の彫刻が展示されていた。しかし、入口にはほこりまみれの太鼓や鐘があり、戟門の石畳道も荒れ果てた状態であった。数百年の歴史を持つ文化財がこのような扱いを受けているのを見て、芥川は再び感慨深くなった。

今回、筆者一行は晴天で気候の良い朝に孔廟を訪れた。百年前の芥川の記述と比較すると、筆者一行が見た蘇州の文廟は管理が整然としており、環境も清潔で、重要な文化財保護区として整備されていた。芥川が当時見た荒廃の光景はもはや見られない。ただし、蘇州の孔子廟へ向かう途中、多くの低層の古い建物が並ぶ中に、西洋風の店舗や飲食店が混在しているのも見受けられた。当時の芥川が目撃したように、中国風と西洋風の衝突感は依然として強く感じられる。特に、伝統と現代の融合が見られる風景は、この地域の歴史と文化の変化を象徴している。次に、文廟の正殿である大成殿に入ると、建物の外観は相変わらず壮大であり、石段には龍の彫刻が見事に施されている。殿内に足を踏み入れると、まず目に入るのは「万世師表」と書かれた額が堂々と掲げられ、その下に孔子像が威厳を持って安置されている。おそらく、日中は太陽が高く輝いていたため、芥川が説明したような暗さは感じられなかったであろう。また、天井に蝙蝠が巣を作っているかどうかを詳しく見ていなかったため、芥川が詠んだ古風な詩情からスペインの画家ゴヤの奇妙で多様な画風に心が引きずられる心境を想像するしかなかった(「江南游記　十五　蘇州城内(下)」p.255)。

芥川は当時、天井に群がる蝙蝠に驚き、「孔子も蝙蝠には閉口でせう」と述べていたが、島津は

「蝠」と「福」が同音であり、中国ではかなり人気があることを教えた(「江南游記　十五　蘇州城内(下)」p.256)。芥川は実際に江戸時代の日本でも蝙蝠が「気味が悪いと云ふよりも、意気なものだと思はれたらしい。蝙蝠安の刺青の如きは確かにその証拠である。しかし、西洋の影響は、何時の間にか塩酸のやうに、地金の江戸を腐らせてしまつた」と述べている(「江南游記十五　蘇州城内(下)」p.256)。これにより、芥川は時折中国で見聞きしたことを日本の状況と比較し、西洋化が日本に与える影響を考察していた。芥川は、日本の近代以前の江戸文化も西洋文化の「腐蝕」を受けており、西洋文化は芥川の目にはまるで「塩酸」のようであり、伝統文化を消滅させ破壊すると考えていた。この影響は日本や中国などの東洋文化にも及んでいると見ていた。孔夫子像の後ろには崇聖祠があり、現在は一般に開放された図書館として利用されている。公園内には、「天文図」や「地理図」などの歴史的価値の高い石碑彫刻が展示されており、彫刻博物館も設けられている。筆者たちはさらに明倫堂に進み、ここは廟学生が修業する場所であり、宋代の名臣で蘇州文廟の創設者である范仲淹を祀っている。

文廟を訪れた後、筆者たちは北に向かい、報恩寺に到着した。芥川の記述によれば、当時の旅行ガイドブックには北寺塔の前の草原が処刑場だったと記されており、人血によって草原が特に茂っていたとされている。芥川が訪れた際、風と日の光が九層の白い壁の高い塔の下で「籃を携へた婆さんたち」を見て、静かで穏やかな田園風景のように感じたと言われている(「江南游記　十三　蘇州城内(上)」p.249)。報恩寺は別名北寺塔とも呼ばれ、筆者は寺院の外観が歴史的で壮観であると感じた。当時の処刑場の雰囲気はもはや感じられなかった。「江南遊記」に記載されているように、北寺塔前はかつて死刑執行場であり、報恩寺は神明の加護を受ける場所であり、この二つを比較すると、生と死は隣り合わせであることを感じた。その日、多くの信者が参拝に訪れ、筆者も彼らと一緒に神仏を巡った。それから、筆者一行は拙政園と留園を訪れ、これらは蘇州四大名園として知られ、江南の私家庭園の模範とされている。1997年には他のいくつの庭園と共に、ユネスコの世界文化遺産に登録された。芥川は「江南游記　二十　蘇州の水」の中で、蘇州の庭園と水景を「主人」と「客」の対話形式で描写している。「主人」は蘇州には「名高い庭がある」と言って、「客」は「それも皆つまらないのぢゃないか？」と答え、「主人」はそれに同意するが、「水路だけは実際に美しい。日本にすれば松江だね。しかし、あの白壁の影が、狭い川に落ちている場所は、松江でもちょいと見られさうもない。」と応じている(「江南游記　二十　蘇州の水」p.272)。芥川は「江南游記」で、蘇州の水を特に記述しており、川や池の水が蘇州の美しい風景を形成していることを述べている。したがって、庭園の水景は蘇州訪問の際に必見の景色と言えるであろう。

拙政園は約五万二千平方メートルの広さを誇り、東部、中部、西部の三つのエリアに分かれている。全体的に見て美しい景色が広がり、風光明媚な雰囲気が漂っている。各エリアにはそれぞれ特

色があり、特に中部エリアは最も特徴的な部分とされている。ここでは、庭園全体の三分の一を占める大きな池があり、その周りには緑の木々が茂り、心地よい景色が広がっている。多くの観光客が池のほとりで休憩している。今回は時間の制約で一部のエリアしか訪れることができなかったが、庭園の美しい池の風景は非常に印象的であった。

その後、留園に足を運んだ。芥川は「江南游記」の中で留園の「屋敷全体の広いのには、聊か妙な心もちになつた」と述べている(「江南游記　二十　蘇州の水」p.270)。留園は三万平方メートル以上の広大な敷地を有し、築山や奇岩、亭台などの美しい景観で知られている。東、西、北、中の四つのエリアに分かれており、中央の部分に位置する寒碧山房が最も特色豊かである。各エリアの景色は建物で区切られているが、窓や廊下を通じて連結されており、散策しながら池や山、亭などを楽しむことができる。また、芥川は日本の作家である徳富蘆花(1868-1927)の著書『自然と人生』を引用し、蘇州の美しい水景を賞賛している。しかし、芥川は、留園は「白壁の八幡知らずだね。どちらへ行つても同じやうに、廊下や座敷が続いてゐた。庭も大邸同じやうに、竹だの芭蕉だの太鼓石だの、似たやうな物があるばかりだから、いよいよ迷子になりかねない」と述べている(「江南游記　二十　蘇州の水」p.270)。芥川にとって、人工の景観は美しいが、しばしば興味を引かないものであり、自然の風景こそが最も美しいと考えられている。「江南游記　十九　寒山寺と虎邱」では、「客」と「主人」の対話形式で、蘇州について尋ねる場面が描かれている。「主人」は次のように答えている。「蘇州は好い処だよ。僕に云はせれば江南第一だね。まずあすこは西湖のやうに、ヤンキイ趣味に染んでゐない。それだけでも難有い気がした。」(「江南游記　十九　寒山寺と虎邱」pp.266)。芥川にとって、アメリカの悪い影響を受けていないという点が「難有い」と考えられ、それゆえに蘇州が「江南第一」とされ、そこに芥川の西洋化に対する批判的な気持ちが露わにされている。「客」は続けて、「姑蘇城外の寒山寺は？」と尋ねた。「主人」は、「寒山寺かい？寒山寺は、――誰でも支那へ行つた連中に聞いて見給へ。きつと皆下らんと云ふから」と驚くべき答えを返した。(「江南游記　十九　寒山寺と虎邱」p.266)。「今の寒山寺は明治四十四年(筆者注:1911年)に江蘇の巡撫程徳全が、重建したと云ふ事だが、本堂と云はず、鐘楼と云はず、悉く紅殻を塗り立てた、俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち烏啼くどころの騒ぎぢゃない」(「江南游記　十九　寒山寺と虎邱」pp.267)。「主人」は、その後、程徳全が当時、寒山寺を修復したのは、日本人が寒山寺を熱愛し、毎年多くの日本人が参拝に訪れるためだと聞いたからだと説明した。しかし、大衆迎合的な修復工事は、称賛を得るどころか後世からの嘲笑を招いてしまったとは予想もしていなかったようである。この修復工事の失敗により、芥川も日本の西洋追随の官僚たちをけなし、結局、芥川は常に中国を日本の対比対象として捉え、中国を見ながら日本を考えていた。不可逆の西洋化により東洋文明の根源が失われる中、芥川は日本の未来に懸念を抱いていた。芥川が寒山寺を訪れた時

の陰湿で冷たい気候とは異なり、筆者一行が寒山寺に到着したこの日は、秋の爽やかな空気で晴れ渡り、見渡す限りの雲一つない空を見上げると、楓橋鎮にそびえ立つ千年の寺院の古い雰囲気に詩の情感が充満していた。寒山寺の広大な敷地内には、各寺院が多くの仏像を祀っており、今回は時間の制約から、われわれはいくつかの寺院しか訪れなかった。大雄宝殿は非常に壮大で、その内部には非常に厳かに阿弥陀仏像が祀られており、羅漢堂には慈悲に満ちた観音仏像が見られ、大悲殿には黒面観音像があり、筆者は黒面観音像の前で静かに手を合わせ、世界の安寧と平和を祈願した。信者たちにとって重要なのは、神仏が自分の願いをかなえてくださるかどうかであり、心の中での祈りが神仏に届くかどうかであろう。信者は、世俗に合わせた修繕によって敬虔な信仰心が変わることはない。

フィールドワーク一行が訪れた蘇州の日はこの旅の最終日であり、中国支部長の秦剛先生は、蘇州で最も有名な「山塘府邸」での夕食を手配してくださった。山塘街は姑蘇第一名街として古くから親しまれている。この街路は江蘇省蘇州市姑蘇区にある約1200年の歴史を持つ歩行者天国で、西の虎丘から東の閶門外にある古い運河まで続き、全長は3829メートルにも及ぶ。詩人白居易が蘇州の刺史に就任した際、交通の利便性を高めるためにこの地を開発したと伝えられている。その道は「山塘街」と名付けられ、河と街が約七里にわたることから「七里山塘」とも呼ばれている。

「山塘府邸」の「醉月軒」での食事の席では、蘇州の美酒と美食に舌鼓を打ちながら、本大会の執行長今野哲先生の魅力的な紹介により、参加者一人ひとりがこの旅の感想と感動を語り合った。笑い声が絶え間なく響く中、初めて学会の活動に参加した埼玉大学の学部生、西牧花さんの感動の涙も見られ、多くの人が笑いながらも感動を共有した。微酔いの中で互いに惜別の言葉を交わし皆が2024年秋台湾での再会を約束し、芥川龍之介が百年前に訪れた上海と蘇州を巡る旅の完璧な締めくくりを祝った。

この五日間のスケジュールを振り返ると、最初の二日間は論文発表が行われ、その後三日間は、芥川が百年前に訪れた上海と蘇州を再訪した。上海や蘇州を再訪する際には、文学や歴史の専門家が解説を行い、その過程で芥川の足跡や当時の情景をリアルに感じることができた。この五日間にわたる充実したスケジュールとフィールドワークは、筆者にとって大いに有益であり、貴重な体験となった。文人作家であっても、政治に関わることを避ける傾向があるが、同時に世の中の動向に対する心配を捨てることは難しいものである。筆者も同様に、このジレンマを感じることがある。

本稿では、今回のフィールドワークを、芥川の「上海游記」と「江南游記」での記述と詳細に比較し、その成果をより正確に描写することを目指したいと考える。この学会で、筆者は多くの若手の芥川文学研究者と交流する機会を得た。そこで、芥川文学研究の新たな方向性やアプローチについての刺激的な議論を通じて、自らの研究への新たな視点を得ることができた。また、台湾の日本文

学研究のさらなる発展に貢献するため、今後も積極的に研究活動を続け、国際的な学術コミュニティとの連携を強化していきたいと考えている。

引用文献:
『芥川龍之介全集　第八巻』。東京:岩波書店。1996.6。

＊ご執筆者のみなさまのご協力に感謝申し上げます。
　掲載に際しまして、原則そのままですが、明らかな誤字や体裁などを直しております。ご了承ください。